

授業で使える当館所蔵地図

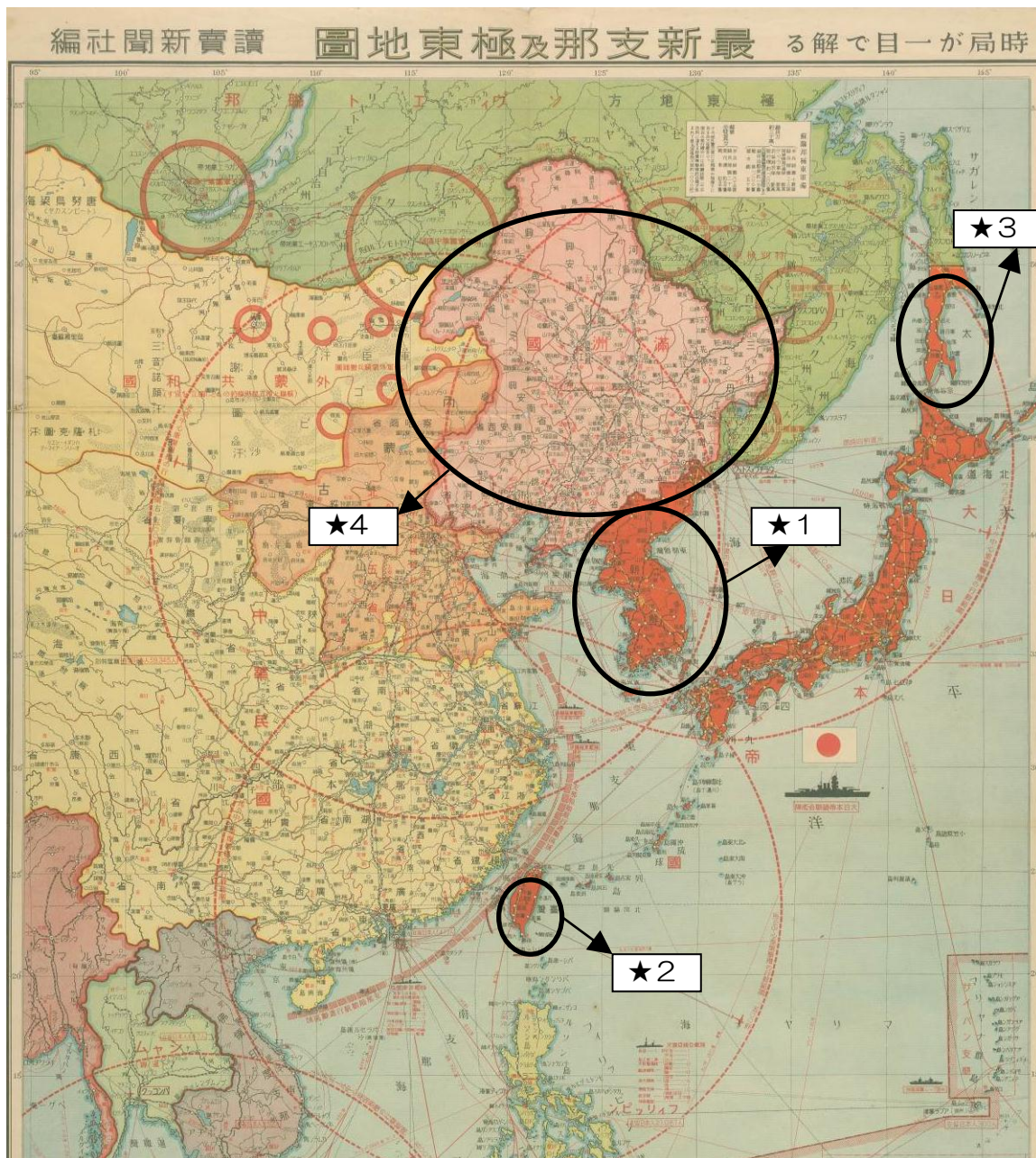
No. 4 『時局が一目で解る最新支那及極東地図』

作成年：1938（昭和12）年

サイズ：79×55 cm

作者：森芳雄（製図・彫刻・印刷）

読売新聞社（著・発行）



【解説】

授業でこの地図を使用する際に注目したいのは、昭和初期の日本の領土、支配地域である。この当時は、日清戦争、日露戦争を通して、朝鮮半島、樺太南部、台湾が含まれることとなり、現在よりも日本の範囲が異なっていた。地図中では赤色で着色されており、一目で現在との違いが分かるようになっている。この地図は、読売新聞に掲載されていたものであり、その当時の人々の日本の範囲に対する認識も、現在とは大きく異なっていたことが想像される。

★1 朝鮮半島

日本は明治の初めに、朝鮮に第一次～第三次日韓協約を結ばせ、勢力を伸ばそうとした。1894年には朝鮮の内乱をきっかけに、日清戦争が起こった。その後、ロシアが朝鮮に勢力を伸ばし、1904年、日露戦争となった。この2つの戦争を通して、朝鮮半島は日本の勢力下となり、日本は1910年に朝鮮半島を併合した。植民地となった朝鮮では、日本語での教育や土地の制度の改革などが進められた。このような状況下で、朝鮮の人々は、粘り強く独立運動（三・一独立運動など）を続けていった。日本の支配は終戦の1945年まで続く。

★2 台湾

1894年に始まった日清戦争に日本は勝利し、その結果として、日本は清から多額の賠償金を得るとともに、リュートン半島の一部と台湾を植民地として支配することとなった。

★3 樺太の南部

1904年に始まった日露戦争の講和条約（ポーツマス条約）において、韓国を日本の勢力下に置くことをロシアに認めさせた。また、日本は南満州鉄道と樺太の南部をロシアから得ることとなった。

★4 満州

日露戦争を通して、日本は満州での権益を手に入れた。昭和に入り、世界的な不景気が起こると、中国に勢力を伸ばして景気回復を図ろうとする考えや、満州での権益を守らなければならない「満州は日本の生命線」という考えが国民に広がった。その後、日本は満州へ勢力を伸ばし、1931年には満州事変をきっかけに、日本が満州を占領、満州国として独立させ、政治の実権を日本が握ることとなった。

【用語について】

・玉山（ギョウザン）

玉山は台湾中央部に位置する山で、3,952mの高さがある。台湾が日本に含まれていた時は「新高山」と呼ばれていた（「ニイタカヤマノボレ」の暗号文に使われることでも知られる）。富士山の3,776mよりも高く、当時は日本一高い山であり、人々に広く認識されていたと考えられる。本地図上に玉山は位置していない。しかし、学習の導入時などにこの事実を工夫して提示することで、「富士山は日本一の山」と考えている児童生徒に対して、追究意欲を高めることができると考えられる。

【利用の例】

○昭和初期の日本の領土を知ることができる。

→日清戦争、日露戦争で領土が拡張し、台湾、樺太南部、朝鮮半島が日本の領土として記載されている。地図帳で現在の日本の領土と比較することで、その違いを明確にすることができる。他の資料と組み合わせることで、どうして領土が拡張しているのかについて追究することも可能である。

○当時の人々の領土に対する認識について考えることができる。

→現在は日本ではない国、地域が日本に属していたことから、当時の人々の領土に対する意識も異なっていたことが想像できる。例えば、「富士山は日本一高い山ではなかった」という事実がある。当時は、台湾の中央部にある新高山（玉山）が日本の最高峰であった。単元の導入時に、この事実を工夫して提示することで、戦争を通じた日本の領土の拡張について、追究することができる。

〈展開例〉

「日本一の山は新高山だった」→「所蔵地図、地図帳、年表等を調べる」→「当時は戦争を通して領土が拡張し、台湾の新高山が日本一だった。」

○当時の周辺諸国の名前が分かる。

→ソヴィエト連邦、中華民国など現在とは異なる国名が存在する。地図帳で現在の国名を確認することで、日本の周辺諸国の変遷を大まかにつかむことができる。また、横書きが右から始まるなど、表記の仕方も現在とは異なっており、児童の関心を高めることができる。

○地形構造の違いが分かる。

→台湾は新期造山帯、中国の沿岸部は安定陸塊（安定大陸）である。